

ちたる甲なるゆゑに、頭には疵付かず。その内に手勢大勢にて、彼者を討留めたり。是彼の一將なる善道寺右馬介なりけり。初め最上義光の前にて、此度本庄越前が首を取らずんば再び歸らじと廣言しけるゆゑなり。右馬介が刀は貞宗なり。此刀をば本庄越前分取して景勝へ上りたり。後に此の刀紀伊大納言頼宣の御所有と成るを、遺物として徳川將軍家へ献上せらる。本庄貞宗といふは是なり。又本庄越前が着したる明珍の甲は、後に直江山城守の所有と成りたるを、本多安房守政重、山城守の鞆養子と成り、結納の使をば本多佐渡守政信の家來蜂岡伊賀勤めける時、山城守悦びの餘りに、彼の甲をば引出物に出したり。依りて夫より此甲蜂岡伊賀が家に傳來し、今に加州本多が家來蜂岡才右衛門所持す。とあり。右傳話に據りて考ふるに、蜂岡伊賀は本多佐州の家人なるを、本多元祖安房守加州へ別家せし時、本家よりの附人となりしと聞ゆ。蜂岡才右衛門は三代又太郎の事ならん。

○本多兵庫傳話

三壺記に云ふ。正保四年六月三日、本多前房州大夢老歿せ

らる。菩提所大乘寺にて大法會を執行せられ、回僊院殿大夢道中居士と號し、廟堂を造營ありて、善盡し美つくし、孝養供養申計りなし。追付き江戸より御使下り、御折紙持参し、長男長松丸に名跡異儀なく仰付けられたり。翌年五月下旬利常卿江戸御發駕被爲成、直に日光山へ御參詣被遊、ねづ越を経て越後へ御出で、金澤御着、本多の邸へ入らせられ、お竹様の御産後御對面被遊、小松へ御着城也。長松は頓て金澤より小松へ至り、御禮として登城す。利常卿父大夢秘藏の古筆の儀御尋ありけるに、長松丸左様のもの無御座旨申上ぐ。利常卿御意被遊は、家の第一の重寶なり。なき事はあらじ。長松せがれなればとて、家老共は知らずといふ仔細有間敷事也。出頭の者共被召寄、吟味仰付けられたりけるに、大夢病氣指重り往生せし刻、本多兵庫大夢の居間より簞笥一つ取出し、居宅へ爲持遣したるよし注進す。頓て兵庫を吟味被仰付處、右之趣露顯す。此兵庫は寺田庄左衛門とて、家久敷者の子也。寺田左京と名付け、せがれの時より近習に召仕ひ、殊の外出頭し、本多の苗字をあたへて本多兵庫と名乗り、大夢歿せし時追腹可仕

者にて有之處、無所存なる心底、天魔の入替るにやと諸人申しならしけり。依之兵庫は大野宮坂の松原にて殺害命ぜられ、本多家老松田助左衛門・篠井雅樂・蜂岡伊賀・大橋新丞は閉門被仰付といへども、頓て御赦免にて與力に被仰付と云々。按ずるに、元和二年の安房守家人武功書上帳に、三百石、歳三十八、寺田庄左衛門、本國三河。とあり。此の庄左衛門後苗字を賜はり、本多兵庫と名乗れるとなり。平次おもふに、今大乘寺に元祖安房守政重の判書あり。其の文如左。

一、五さつづ

一、小ばこの内

右長松參

大事のぐんぼうのひでんに候間、としたけ候て、長松一人して見てがてん、咄可仕はかり事に候間、人に聞候まじく。

うのとし五月吉日

政 重判

右は大夢の直筆也とて、大乘寺へ寄附し、今掛軸となし什物とす。按ずるに、うのとしは寛永十六年己卯なるべし。

右書中に載せられし五冊圖並に小箱三冊軍法の秘傳、是則ち利常卿の穿鑿し給ふ大夢秘藏の古筆なるべし。本多長松は、正保四年三月廿七日安房守政重致仕するにより相續命ぜられたり。此の時十七歳なり。初め左馬助と稱し、相續後安房政長と稱す。貞享三年十一月大老職と成り、元祿四年十二月從五位下安房守に叙任す。是二代安房にて、老名を素立軒と稱す。大乘寺に左の直筆の追悼の和歌を傳來す。

をしとみしとしの小車めぐりきて

たかき跡問ふ法の道かな

延寶七ノ六月三日

政 長

又五代安房守政昌の和歌も傳來す。

淺からぬ人の心をたぐへては

冬咲くむめのかほりとぞおもふ

右は蜂岡伊賀舊邸の因みに記載して、本多町古蹟舊地の考證に備ふ。本多兵庫が舊邸はいづれの地ならんか、追考す